平城京左京三条五坊三坪

平成19年度発掘調査報告書

2008

（財）元興寺文化財研究所

平城京左京三条五坊三坪

平成19年度発掘調査報告書

2008

（財）元興寺文化財研究所

序

本書に掲載しました遺跡は、平城京の左京三条五坊三坪にあたり、現在のJR奈良駅に近接した位置にあたります。

現在奈良市内では、平成22年１月から開催される平城遷都1300年記念事業に向けて、アクセス道路の拡幅やJR奈良駅の高架化に伴う駅前の再開発などが行われており、古都奈良の中心部の様相が大きく変ろうとしています。

これに合わせてJRや近鉄の駅周辺では、集合住宅や高齢者向け集合住宅の建設が数を増しており、今回の発掘調査も当該地域におけるマンション建設に先立つものです。

調査の成果として、奈良時代の建物や中世の土取り穴などのほか、古墳時代前期の溝跡も発見され、平城京成立以前の土地利用を考えるうえで、貴重な情報を提供できるものと考えております。

小冊子ではありますが、本書が平城京研究はもとより、文化財の保存、保護に少しでも役立つならば幸いに存じます。

なお、調査や報告書作成に際しては、多くの機関や関係者のご協力やご助言を賜りました。ここに感謝を申し上げます。

平成20年３月

（財）元興寺文化財研究所

理事長　辻村泰善

例　言

1．本書は、平城京左京三条五坊三坪における発掘調査の成果をまとめたものである。
2．調査地は、奈良市大宮町一丁目68－１で、開発対象地の敷地面積は1,513㎡、建築予定平面積は902㎡、発掘調査面積は約700㎡である。
3．調査は、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所が、平成19年５月31日～７月19日まで現地での作業を実施し、狭川真一・角南聡一郎・岡本広義が担当した。整理及び報告書作成作業は、調査終了後速やかに開始し、平成19年度をそれに充てた。
4．調査地の実測および写真撮影は、調査担当者および藤井章穂が行い、榊真麻・小幡千晶・篠井ちひろの協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、武田浩子・仲井光代・榊が行い、写真撮影は大久保治（情報管理室）が担当した。調査地の基準点測量は、世界測地系2000を利用した。
5．本書の執筆は、第１章（１）及び（２）を伊藤健司、第２章（３）を角南が担当したほかは、編集を含めて狭川が担当した。

目　次

第１章　はじめに
（１）調査に至る経緯 ―― 1
（２）調査体制 ―― 2
（３）周辺の調査 ―― 3

第２章　調査の成果
（１）層序 ―― 4
（２）検出遺構 ―― 4
（３）出土遺物 ―― 6

第３章　総　括 ―― 10

第１章　はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成19年１月に株式会社マイスター（代表取締役 松尾 哲）から、奈良県教育委員会教育長あてに共同住宅建設に係る発掘の届出が提出された。当該地は、平城京の条坊復元で左京三条五坊三坪にあたることから、発掘調査の必要があると判断された。

同年３月、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会と（財）元興寺文化財研究所が協議を行った結果、当研究所が受託することでまとまり、当研究所と原因者である株式会社マイスターとの間で契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、調査に関する費用は原因者が負担した。同時に重機等機器類や現地作業員の手配についても原因者が行うこととなった。

調査は、平成19年５月31日から開始し、排土処理を場内で行なった関係で、発掘調査は反転作業となった。また、梅雨期に重なったため雨天の日が多く、期間の長さにくらべて実質的な調査日数はきわめて少ない。なお、調査は７月19日に埋め戻しを完了して終了した。

調査終了後、遺物整理・報告書作成に関して別途原因者と当研究所が契約を締結し、速やかに開始した。

発掘調査及び遺物整理・報告書作成については、株式会社マイスターの全面的な支援や協力があり、無事に終了することができた。また奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の適切な指導を賜った。

Fig. 1　調査地点位置図（1／30,000）

(2) 調査体制

発掘調査及び遺物整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導 ： 奈良県教育委員会、奈良市教育委員会

調査主体 ： （財）元興寺文化財研究所

理事長　　辻村泰善

所　長　　坪井清足

事務局長　　奥洞二郎

研究部長　　狭川真一

人文考古学研究室

室　長　　伊藤健司

主任研究員　角南聡一郎・佐藤亜聖・藤井章徳

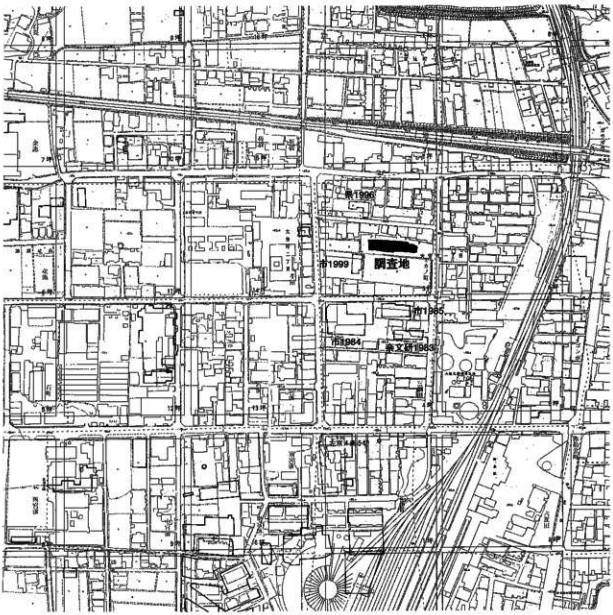


Fig. 2　調査地周辺の調査状況（1／4,000）

奈良文化財研究所編『平城京条坊総合地図』2003年の「蔵ノ町」「三条」に加筆

特任学芸員　岡本広義
現地作業員：株式会社大毀・有限会社ワーク
調査補助員：武田浩子・仲井光代・神明美・佐伯公子・奥田智代（人文考古学研究室）、
小幡千晶（奈良教育大学）、榊真麻・篠井ちひろ（奈良大学）

発掘調査及び遺物整理にあたり、多くの方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）
西藤清秀（奈良県教育委員会）、篠原豊一・久保邦江（奈良市教育委員会）

(3) 周辺の調査

当該調査地と同じ左京三条五坊三坪内では、西側隣接地が平成10年度に調査されており、庄内式最終末段階の南北溝と、奈良時代の掘立柱建物、井戸等が検出されている。なかでも井戸は須恵質の井戸枠を有し、直径92～96cm、高さ108～112cmの円筒形を呈するものであった（奈良市1999）。

また、北西近接地は平成7年度に調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物のほか、縄文時代後期の貯蔵穴をはじめ、時期不詳の竪穴住居と大溝が確認された（奈良県1996）。大溝については、先述の地点で検出された南北溝の延長である可能性が指摘されている。

南側に隣接した左京三条五坊四坪では、3地点の調査が行われている。昭和57年度の調査は今次の調査区のほぼ真南に位置し、奈良時代の掘立柱建物や古墳時代の溝などが検出された（奈文研1983）。昭和58年度の調査は、今次調査の南西方向にあたり、奈良時代の掘立柱建物のほか、調査区の北端で左京三条五坊三坪と四坪間の坪境小路の南側溝が確認されている。また、調査区を北東から南西方向に貫通する古墳時代の流路が検出されている（奈良市1984）。

また、その東側の調査では、掘立柱建物と左京三条五坊三坪と四坪間の坪境小路南側溝と思われる東西溝、さらにそれと並行して南側を東西に走る溝が確認されている（奈良市1985）。

(参考文献)

奈良国立文化財研究所　1983「左京（外京）三条五坊四坪の調査　第141-7次」『昭和57年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
奈良県立橿原考古学研究所　1996「左京三条五坊三坪の調査」『奈良県遺跡調査概報1995年度（第一分冊）』
奈良市教育委員会　1984「平城京左京三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書―昭和58年度―』
奈良市教育委員会　1985「平城京左京（外京）三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書―昭和59年度―』
奈良市教育委員会　1999「平城京左京三条五坊三坪・油阪遺跡の調査　第422次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―平成10年度―』

調査地からの風景
（北東方向／JR関西線高架工事中）

第２章　調査の成果

今回の調査は、敷地面積に対して指示された調査範囲が広いことから、東西に分割して調査を実施することとし、重機類の出入り等を想定して、まず西半部を調査し、引き続いて東半部を実施するという工程で臨んだ。

調査の結果、調査区のほぼ全面に遺構が存在しており、西半部では南北に貫流する大溝を検出した他、掘立柱建物や土坑、ピット等を確認した。これに対して東半部は、中世以降の土取穴とみられる大土坑群が調査区のほぼ全域を占め、遺構面検出段階において東半部で地山（黄褐色粘土層）が確認されたのは、ごく一部にすぎないという状況であった。このような状況に輪を掛けて、調査期間が梅雨時期にかかったことから、予定していた日程の大半が雨にたたられるという劣悪な工程となり、遺憾ながら土坑群についてはそのすべてを完掘することができなかった。

(1) 層序

調査直前は宅地で、表土下約90～100cmの間は現代の盛土が乗り、その直下に宅地になる前の水田時の表土とみられる、厚さ５cm前後の黒灰色粘土層とその床土と思われる灰色シルト質土や茶灰色粘土が、調査区のほぼ全面に確認できた。これらを除去すると厚さ約10～20cmの明黄灰色粘土層があり、遺物包含層を形成していた。その直下から中世以前の遺構面が現れ、すべての遺構は地山と認識した黄褐色粘土層から切り込んでいた。

(2) 検出遺構

掘立柱建物

SB010（Fig.３・４、PL.２・３）　調査区西南隅で確認した掘立柱建物である。東西２間（3.8m以上）、南北１間（1.9m以上）分を確認したにとどまる。柱間はおおよその柱痕跡が認識できた掘方ｂ－ｃ及び掘方ｃ－ｄで1.93m程度で、建物の方位は、N-1°15′-Eである。柱掘方は隅丸長方形または略円形を呈し、長さは50×70cm前後、深さは30～75cmを測る。柱痕跡は掘方dが最も明瞭で、直径15cm前後とみられる。ただ、掘方b・cでは上部でやや広がる傾向がみられ、さらに上面に黄茶褐色砂質土が覆っていて、検出時には柱痕跡が確認できなかったことから、柱は抜き取られたものと理解している。

柱穴状遺構

SX011（Fig.４、PL.２・３）　SB010柱掘方bの南側約１mの位置にある、長さ50×60cm程度、深さ50cmの柱穴状の遺構である。土層観察図の１で示した層は、SB010の柱掘方で確認した柱痕跡に類似したものであるが、SB010とは

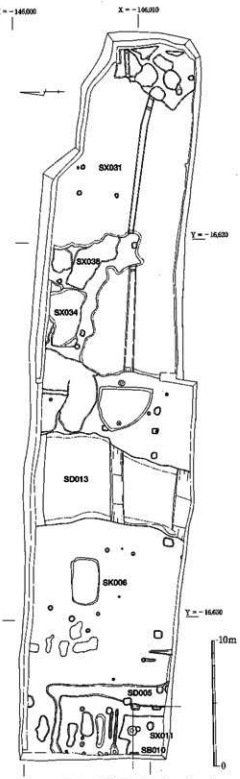


Fig. 3　検出遺構配置図（1／300）

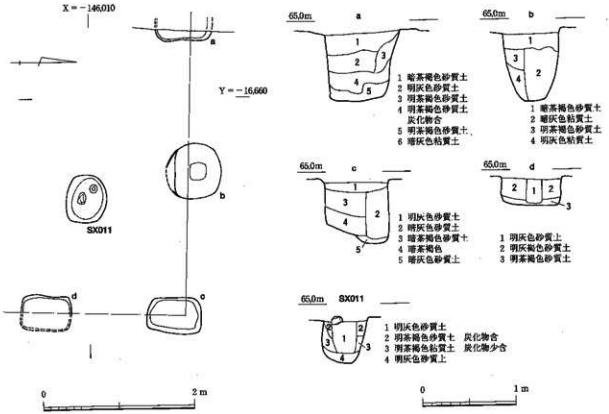


Fig. 4　SB010実測図（1／50）及び柱堀方土層観察図（1／40）

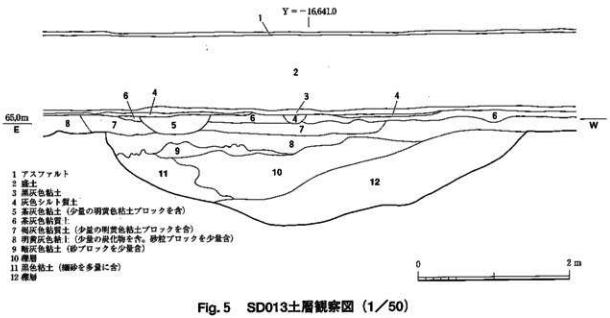


Fig. 5　SD013土層観察図（1／50）

柱筋も通らないため無関係と考えざるを得ない。他に関連するピットも確認できず、性格を特定できない。

溝

SD005（Fig. 3、PL. 1）　調査区西端で逆L字形になる浅い溝で、検出全長約14m、幅0.5～1.6m、深さ0.1m内外を測る。茶灰色粘質土を主たる埋土とする。

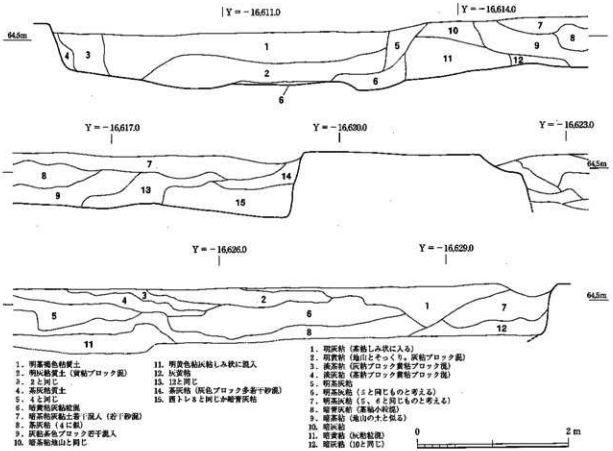


Fig. 6　SX031土層観察図（1／50）

SD013（Fig. 3・5、PL. 1・3）　調査区やや西寄りを南北に貫通する大溝で、わずかに南で西へ蛇行する。溝の幅は約5～7m、深さは最深部で約1.1mを測り、埋土は粒が大きめの砂礫層が主体で、大半が一気に埋まったような状況を示していた。埋土中に自然木片が多数含まれていたが、製品は認められなかった。また土器も若干量出土したが、いずれも砂礫層からの出土である。

なお、諸事情から完掘することをあきらめ、部分的なトレンチ調査とならざるを得なかったことは遺憾である。

土坑

SK006（Fig. 3、PL. 1）　長さ3.7m、幅2.0mの隅丸長方形で、深さ0.2mの浅い土坑である。埋土は、灰色粘土（地山の黄褐色粘土ブロックを含む）の単一層である。

大土坑群（土取穴群）

SD013以東に集中して確認され、いずれも形状は不整形で、規模もまちまちである。ただ、東半部調査区の東端部分に小規模な土坑が密集している傾向にあり、その一部は大土坑（SX031）に切られるものもある。土取用の土坑と考えられるが、先述のとおり先掘できたものはなく、やや情報不足であることは否めない。ここでは、遺物の出土した遺構を取り上げて、概要を報告する。

SX031（Fig. 3・6、PL. 1）　東半部調査区の大半を占める巨大な土坑で、東西約23m、南北10m以上の規模である。遺構の中程に東西方向のトレンチを設定して、堆積状況を確認した。東側のトレンチでは遺構の底を確認でき、深さ80cm前後である。

SX034（Fig. 3、PL. 1）　東西4.7m、南北2.5m以上で不定形。

SX038（Fig. 3、PL. 1）　東西5.0m以上、南北約2.0mで不定形。SX031に土坑の東端を切られている。

(3) 出土遺物

SB010出土遺物（Fig. 7、PL. 4）

須恵器

坏蓋（1～3）　いずれも細片のため、口径の復元は困難である。いずれの表面もナデ調整が施される。

坏身（4・5）　4は底部のみ残存し、底径10cmである。底部外面には回転ヘラケズリ痕が残る。5は底部のみ残存し、底径10.2cmである。内外面ともナデ調整をし、高台部は貼り付け後ナデ仕上げをする。3は柱掘方ム、他は柱掘方ち出土。

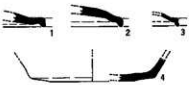


Fig. 7　SB010出土遺物実測図（1／3）

SX011出土遺物（Fig. 9、PL. 7）

須恵器

坏身（8）　口径14.3cm、器高4cm、底径9.6cmで、内外面にヨコナデを施す。

SD013出土遺物（Fig. 8、PL. 4～7）

弥生土器

高杯（1～3）　1・2は基部から裾部、3は裾部のみ残存する。1の外面はヘラミガキを施す。2・3の裾部には円形の透孔を穿つ。

壺（4～9）　4は小型壺で、胴部下半から底部が残存する。底部はやや上げ底状を呈し、底径3.6cmである。外面は指押さえ後ナデを施す。5は直口壺で、口径10.6cmで口頸部のみ残存する。6は広口壺で、口径14.2cm、口縁端部は外部に垂下する。7は壺底部で、底径4.5cmである。内面には放射状の工具痕が、外面には上から下へのケズリ痕が認められる。8は短頸壺で、口径10cm、器高20cm、底径4cmである。胴部上半に「くくく」状のヘラ記号を有する。胴部外面は細かいハケを施し、内面には指頭圧痕が多く残る。底部内面付近には放射状の工具痕が認められる。全体的に粗いつくりである。9は広口複合口縁壺で、口頸部が残存し、口径26.4cmである。口縁部内外面にヨコナデを施す。18は細片で、外面には同心円状とその周囲に鋸歯紋のスタンプが施文されている。同心円状のスタンプ文は、所謂S字状スタンプ文がよく知られるが、本資料はそれらと比して大きく、加えて鋸歯文状の文様もセットである点などは、趣を異にする（萬谷 1985）。

甕（10～18）　10は口頸部のみ残存し、口縁端部は緩やかに外反する。内面にハケの痕跡が認められる。11・12・13は口縁部片である。いずれも口縁部断面「く」字状を呈する。11は、胴部外面タタキ調整を、内面板ナデ調整を施す。12は、口径15.6cm、胴部外面タタキ調整を、内面ハケ調整を施す。13は、口径16.8cm、胴部外面タタキ調整を、内面ケズリ調整を施す。12・13の外面全体に煤の付着が認められる。14は、胴部下半を欠損する。口径16.4cm、胴部外面タタキ調整を、内面ハケ調整後ナデを施す。胴部外面には煤が付着する。15は口縁端部を欠損するのもの、ほぼ完形である。外面はハケ後ナデ調整を施し、内面底部付近には、下から上方向のケズリ痕が残る。底径2cmである。16・17は底部片である。16は、底径4.4cm、内面縦方向の板ナデの後にナデを施し、外面はナデ調整と考えられる。17は、底径4.8cm、外面はナデを施し底部上げ底状を呈する。

SD013出土遺物は、概ね庄内式期前半の資料と考えられる。

萬谷幸美 1985「美園遺跡出土のS字状浮文土器について」『美園』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター pp.510-516

SX031出土遺物（Fig. 9、PL. 7）

土師器

皿（1～4）　いずれも粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面はヨコナデをし、底部外面には指頭圧痕が残る。1は口径10.2cm、器高2.2cm、2は口径10cm、器高2.2cm、3は口径10.1cm、器高2.1cm、4は口径11cm、器高2cmである。13世紀中葉から後半の資料である。

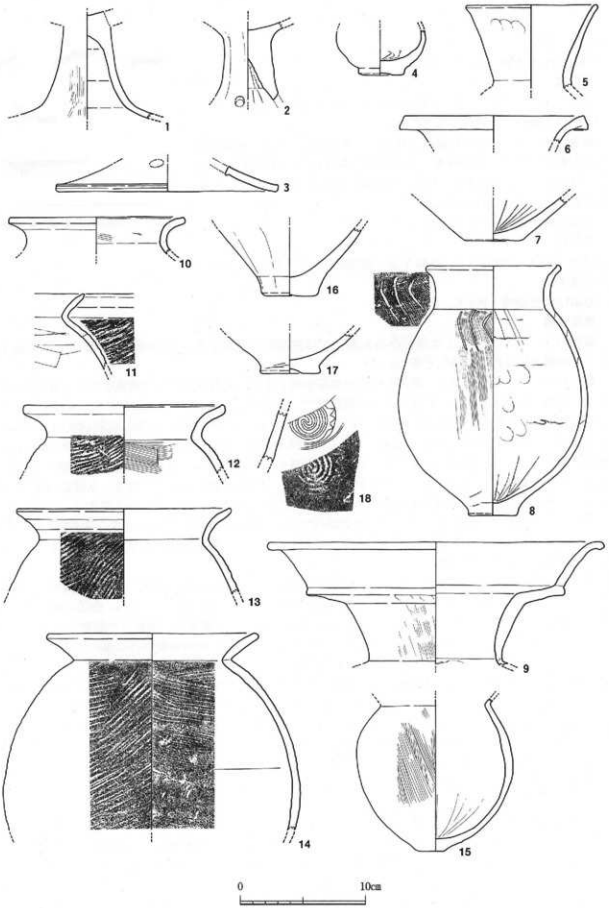


Fig. 8　SD013出土遺物実測図（1／3）

瓦器

椀（5）　口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。内面に精緻なヨコ方向のヘラミガキを、外面は指オサエ後粗いヘラミガキを施す。Ⅲ-a型式と考えられ、12世紀後半から13世紀初頭のものである。

SX034出土遺物

（Fig. 9、PL. 7）

瓦

軒丸瓦（6）　瓦当面の破片である。内区複弁蓮華文を、外区外縁は欠損するものの、鋸歯文を施すものと考えられる。6284型式。

SX038出土遺物

（Fig. 9、PL. 7）

須恵器

皿（7）　細片のため皿としたが、坏の可能性もある。底部外面に十文字状の墨書が残る。

茶灰色粘質土層出土遺物（Fig. 9、PL. 9）

須恵器

坏（9）　底径11.2cmで、胴部内外面はヨコナデをする。内面に漆の付着が認められる。

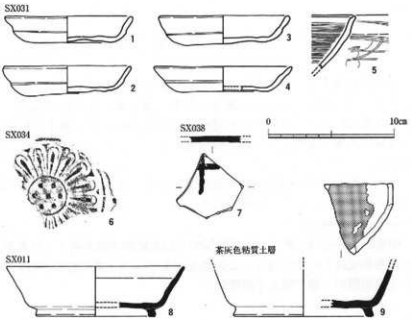
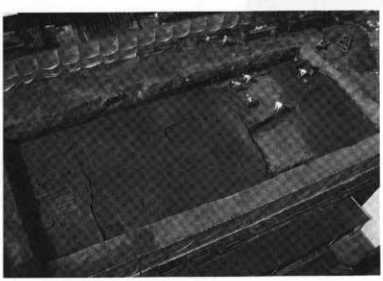


Fig. 9　その他の遺構出土遺物実測図（1／3）



西側調査区清掃風景

第3章　総　括

南北に貫通する大溝SD013は、庄内期前半の土器を出土したことから、概ねその頃に埋没したと考えられる。この延長とみられる溝が、今回の調査地の南西約100mで、昭和58年に奈良市教育委員会が調査した地点において検出されたSD01（奈良市1984）と、埋土の様子や出土遺物の傾向が類似すること、今次検出の溝が南側でやや西方向へ流れをかえていることを踏まえると、両者は同一のものである可能性が高い。

また、掘立柱建物は奈良時代後期とみられ、調査区内に近接して同時期の建物が見られないことや、周辺の調査をみてもその密度は低いことから、この地域が当初からそれほど建物が密集した地点ではなかったことが窺われる。

中世の大土坑は、出土した土師器から13世紀後半頃と考えられるが、規模の大きさもさることながら、その密集度はきわめて高く、この地点で集中して土取り作業が行われていたと考えられる。中世における土地利用の一端が窺えて興味深い。

〔参考文献〕

東側調査区と周辺の風景（西から）

東側調査区表土除去作業風景

Tab. 1　　遺構番号一覧表

S－番号	遺構番号	種別	所見	地区
			（西調査区）	
1		素掘り溝	茶灰色粘質土	B22・23
2	SD005	溝	茶灰色粘質土	A～D21・22
3	SB010a	ピット	茶灰色砂質土	C23
4		土坑	茶灰色粘質土	B22・23
5	SD005	溝	茶灰色粘質土	A22・23
6	SK006	土坑	灰色粘土（黄褐色粘土ブロック含む）	B18・19
7		土坑	灰色粘土（黄褐色粘土ブロック含む）	B18
8	SB010b	柱穴		C22・23
9	SB010c	柱穴		B22・23
10	SB010d	柱穴		C・D22
11	SX011	柱穴		D22
12				B22
13	SD013	流路	暗灰色シルト	
14		ピット	2→14	D21
15		柱穴？	茶灰色粘質土	D15
16		小溝		C21
17		土坑	灰色粘土（黄褐色粘土ブロック含む）	B～D13～15
18		土坑		A・B13～15
19		ピット	茶灰色粘質土	B13
20		くぼみ	S-8・11←20	C23他
21		土坑	灰色粘土（黄褐色粘土ブロック含む）	A13
22		柱穴？		A・B14・15
			（東調査区）	
31	SX031	大土坑	粘土取用大穴	D６他
32		土坑	粘土取用大穴、　茶灰粘埋土	
33		土坑	粘土取用大穴、　茶灰粘埋土	
34	SX034	土坑		A11他
36		土坑	34←36	A－12
37		土坑	21に同じか	13以西
38	SX038	土坑		B10他
39		土坑		D５
41		土坑	31←41	A10
42		ピット		C10
23～30、35、40は欠番				

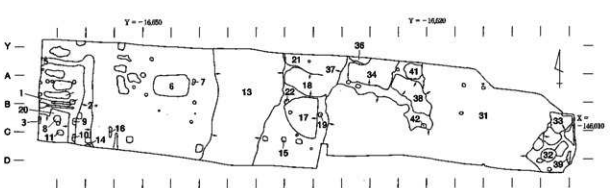


Fig.10　　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図

Tab. 2　　出土遺物一覧表

S-1 茶灰色粘質土

土師器	細片
須恵器	杯・甕・細片
瓦	細片

S-2 茶灰色粘質土

土師器	杯・甕
須恵器	杯B・杯B蓋・壺・甕

S-3

須恵器	細片
瓦	平瓦

S-4 茶灰色粘質土

須恵器	杯
瓦	細片

S-5 茶灰色粘質土

須恵器	壺

S-6 灰色粘土

須恵器	杯・蓋
瓦	丸瓦

S-7 灰色粘土

土師器	細片

S-8

土師器	細片
須恵器	杯B・杯B蓋・皿B・壺
瓦	平瓦
土製品	製塩土器
木製品	先端炭化材

S-8 茶灰色粘質土

土師器	細片
須恵器	杯A・杯B蓋

S-9 茶灰色粘質土

土師器	皿・細片
須恵器	杯B・蓋

S-10

土師器	杯・細片
須恵器	杯B・杯B蓋

S-10 茶灰色粘質土

須恵器	杯B蓋
瓦	細片

S-11

土師器	皿・細片
須恵器	杯B・杯B蓋 皿(転用硯？)・壺
瓦	細片
木製品	先端炭化材

S-12 茶灰色砂質土

須恵器	細片

S-13

弥生土器	高杯・甕
古式土師器	二重口縁壺・長頸壺
須恵器	甕・鉢
木製品	加工木

S-13 上層

弥生土器	甕
木製品	炭化材

S-13 暗灰色シルト 上層

弥生土器	高杯・甕

S-13 茶灰色砂質土

弥生土器	壺・甕
古式土師器	甕

S-13 淡褐色砂

弥生土器	甕

S-13 下層

弥生土器	壺・甕・鉢
古式土師器	高杯

S-15

木製品	加工木

S-16

古式土師器	細片
須恵器	細片

S-17 灰色粘土

古式土師器	甕
須恵器	杯B・杯B蓋・壺・甕
瓦	丸瓦・細片

S-18 灰色粘土

須恵器	壺・長頸壺
瓦	細片
土製品	製塩土器

S-19 茶灰色粘質土

土師器	細片

S-20

土師器	皿・杯蓋
須恵器	杯

S-21 灰色粘土

須恵器	壺

S-31

土師器	皿E・甕・把手・細片
須恵器	杯B・杯B蓋・杯・皿C 甕A・甕
瓦器	椀
瓦	平瓦
土製品	製塩土器

S-32

土師器	細片
須恵器	杯A・甕

S-33

土師器	細片
須恵器	甕

S-34

土師器	甕・細片
須恵器	杯B・壺・甕B
瓦	軒丸瓦・丸瓦・平瓦

S-36

土師器	皿

S-37

土師器	甕A・瓶
須恵器	壺A・皿C・甕A
緑釉陶器	椀
瓦	平瓦

S-38

土師器	細片
須恵器	杯(墨書)・甕

S-39

土師器	細片

S-41

土師器	細片
須恵器	細片

S-42

土師器	細片

茶灰色粘質土

土師器	甕
須恵器	杯B・杯B蓋・壺A・甕
瓦	平瓦
その他	現代土管

包含層

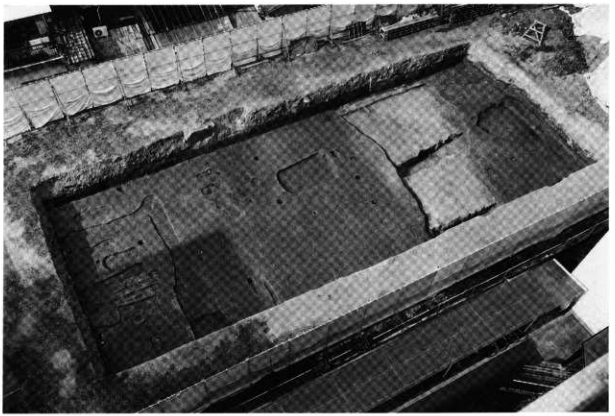
須恵器	杯・杯B蓋・甕・平瓶把手

表土

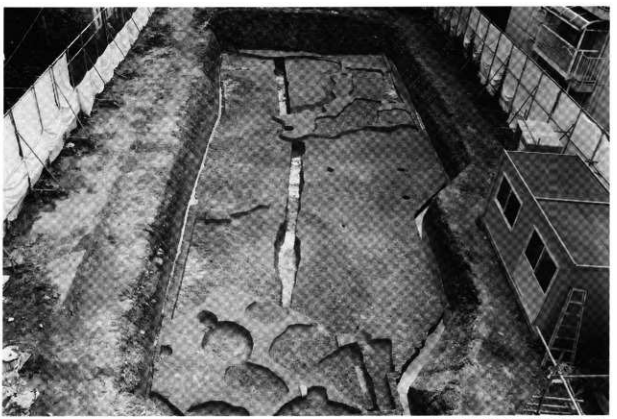
土師器	杯
須恵器	杯B・杯B蓋・壺・皿B 皿C・甕
石製品	五輪塔水輪

写真図版

（凡例）
遺物写真の右下に記す番号は、
Fig.番号－遺物番号
と理解されたい。



調査区西半部の状況（南西から）

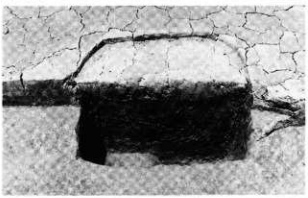


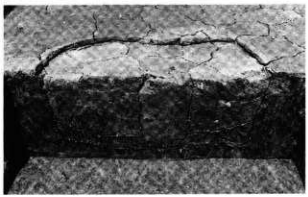
調査区東半部の状況（東から）

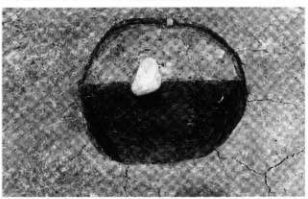
調査区西半部の状況（東から）

掘立柱建物SB010検出状況（南から）

SX013土層観察状況（北から）

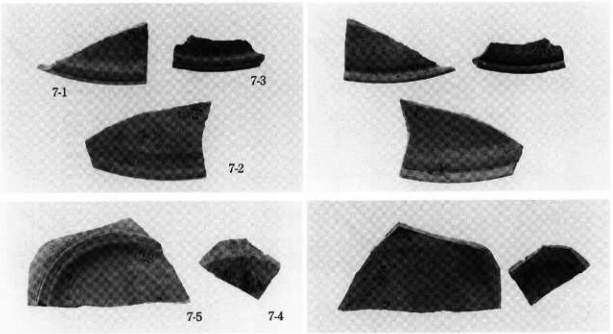




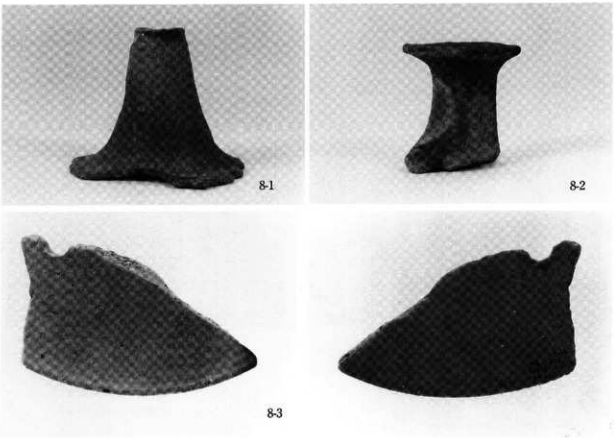


上左：SB010柱堀方a（南から）
上右：SB010柱堀方b（南から）
中左：SB010柱堀方c（南から）
中右：SB010柱堀方d（南から）
下左：SX011（南から）

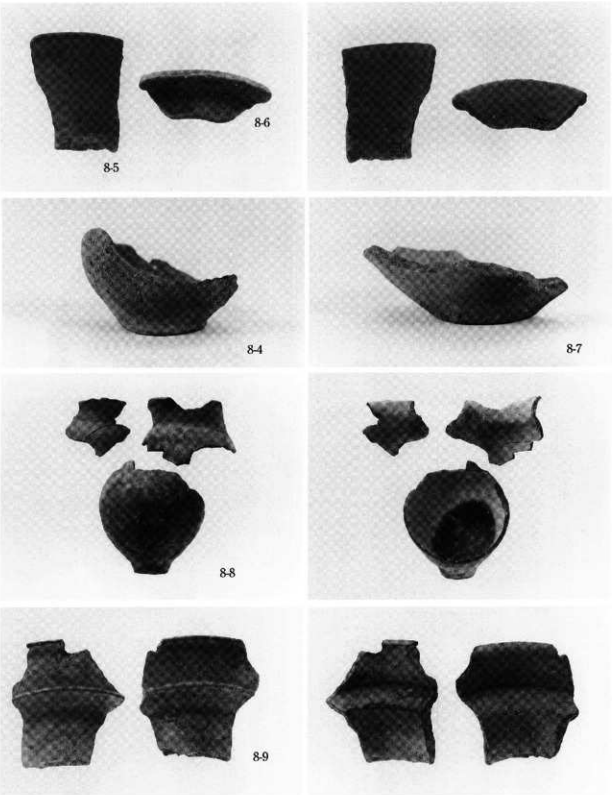
PL.4



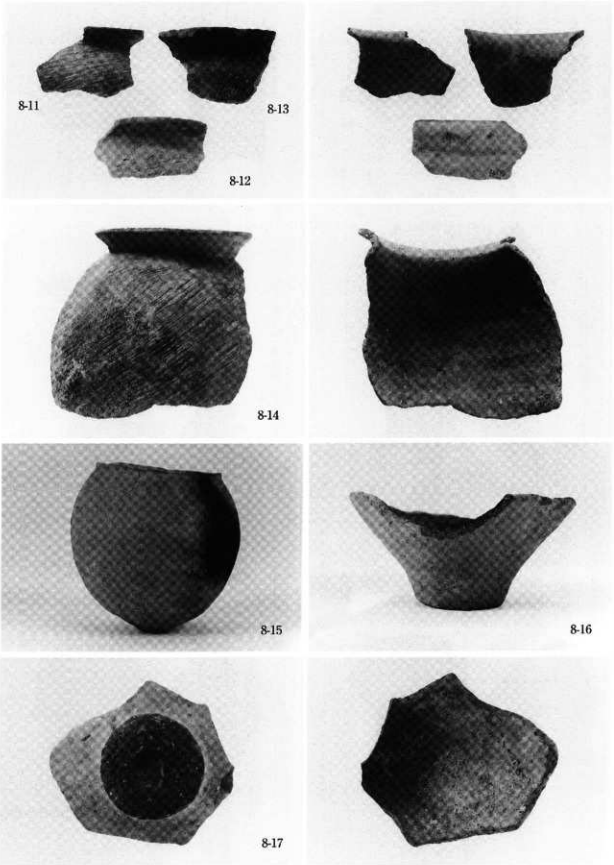
SB010出土遺物



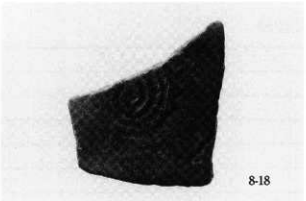
SD013出土遺物



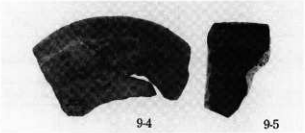
SD013出土遺物



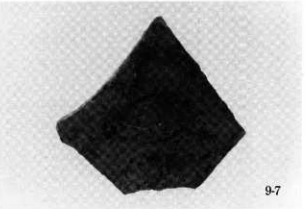
SD013出土遺物

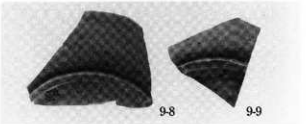


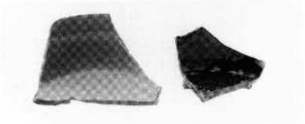
SD013出土遺物



SX031出土遺物







SX034・SX038・SX011・暗茶色粘質土層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょう　さきょう　さんじょう　ごぼう　さんつぼ
書　　名	平城京左京三条五坊三坪
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	狭川真一、伊藤健司、角南聡一郎
編集機関	（財）元興寺文化財研究所
所 在 地	〒630-8392　奈良市中院町11番地　　Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2008年　3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
へいじょうきょう 平城京 さきょうさんじょう 左京三条 ごぼうさんつぼ 五坊三坪	ならけんならしおおみやちょう 奈良県奈良市大宮町 いっちょうめ 一丁目68-1	29201		34° 41′ 00″	135° 49′ 06″	20070531～20070719	700㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平城京 左京三条 五坊三坪	都城跡	古墳時代前期 奈良時代 中世	溝、掘立柱建物、土坑	須恵器、土師器	

要約	古墳時代前期（庄内期）の南北溝１条、奈良時代の掘立柱建物１棟、中世の土坑群（土取り穴と考えられる）多数を検出した。平城京時代の遺構は希薄で、建物以外には顕著なものはみられない。

平城京左京三条五坊三坪

平成19年度発掘調査報告書

平成20（2008）年3月

発行
編集　（財）元興寺文化財研究所

印刷　株式会社　明新社